

「メディア・リテラシー」4

絵本の世界

おじいちゃん



ジョン・バーニンガム作『おじいちゃん』表紙

絵本は小さな子どもがお母さんに読んでもらうものだ、と思う人も多いかもしれません。でも、絵本の中には、みなさんが読んでもおもしろいものがたくさんあります。ウソだと思う人は、大きな本屋の絵本コーナーや図書館の絵本コーナーに行ってみてください。たくさんある絵本の中には、読んでみようと思う絵本があるはずです。それらの絵本を、5冊くらい読んでみましょう。

みなさんが本屋さんや図書館に行く気持ちになるように、私の好きな絵本を1冊紹介します。それは、ジョン・バーニンガムの『おじいちゃん』です。

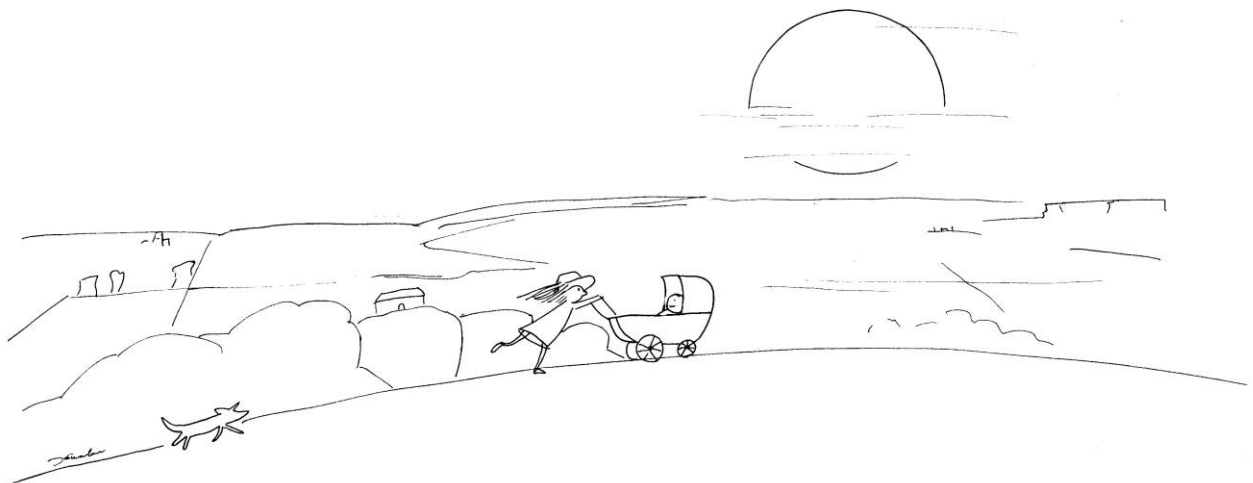
上にある表紙の絵でわかるように、おじいちゃんと、その孫の小さい女の子の話です。「よくきたね げんきかい？」という、おじいちゃんのお迎えの言葉で始まります。そして、小さい女の子が、おじいちゃんが座っていない、大きないすを見ているシーンで終わります。

この絵本は横に長くて、左のページと右のページに画面が分かれています。左のページには、言葉が書いてありますが、色のぬっていない絵もあります。右のページには薄い色の絵で、おじいちゃんと孫娘の交流が描かれています。左のページの、色のない絵は何を表しているのでしょうか？

二人は、ハイキングにいっしょに行くことを想像したり、女の子が好きな「おままごと遊び」をしたり、海辺の砂浜にいっしょに行ったり、道でなわとびをしたり、池で釣りをしたり、雪道でそりをしたりします。ときどき、けんかもします。おじいちゃんは孫娘といつも対等につきあっています。そして、絵本の終わりの方で、おじいちゃんは病気になって、おじいちゃんの大きなすは空席となってしまいます。

そう言えば、死のイメージはすでに 2 枚目のページにもありました。おじいちゃんが育てている植物について、「これがみんな そだったら、ここには はいりきらんなあ」と言います。孫娘はそれを聞いて「むしも てんごくに いくの?」と答えているのです。

死に対して、いのちのつながりを表しているような絵が、実は、一番終わりのページにあります。成長した孫娘がお母さんとなって、赤ちゃんを乗せた乳母車を、元気よく押している絵です。



『おじいちゃん』の終わりのページ

似たテーマの本を一度に 3 冊読むと、そのテーマについていろいろなことを考えることができます。文字だけの本を 3 冊読むのはたいへんですが、絵本なら 1 時間で 3 冊読めるでしょう。3 冊の本の内容を比べてみると、1 冊だけ読んだときとは違う思いをたくさんもつことができます。

テーマの「おじいちゃん」で 3 冊、作者のバーニンガムで 3 冊、読んでみませんか。それぞれあと 2 冊ずつ、おすすめの絵本を紹介しましょう。

おじいちゃん：アリキ『おじいちゃんといっしょに』、天野祐吉『ぼくのおじいちゃんのかお』

バーニンガム：『なみにきをつけて シャーリー』、『ガンピーさんのふなあそび』

(1157 字)

(2020.12 Written by Masami KADOKURA)

(All pictures are drawn by Hinako FUJIMURA)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典: 「たどくのひろば」 (<http://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use this work, please indicate the source as in the example above.